

アメリカの保育方法史の研究

ー幼児学校の場合ー

米村佳樹

(四国短期大学部)

1. はじめに

1820年代後半から1830年代にかけて幼児学校がイギリスからアメリカ合衆国のニューヨークやフィラデルフィア、ボストンなどの都市に導入・展開された。本発表は、アメリカ合衆国の幼児学校における保育方法を明らかにすることを目的としている。American Journal of Education (1826年、創刊)は、イギリスのウィルダースピンやW. ウィルソン、D. ゴイダーの幼児学校論の抜粋と幼児学校の実際の紹介、ペスタロッチの幼児教育論の掲載などを通してアメリカの幼児学校運動の展開に大きく貢献した。これらの幼児学校の理論と実際に関する情報やアメリカの各都市で発行された幼児学校の手引書、英米の幼児学校の見学は、教師にとって何よりの拠り所であった。以下、ニューヨークやフィラデルフィア、ボストンを中心に、この教育雑誌や女性雑誌“Ladies' Magazine”、幼児学校協会の年報、手引書などを手掛かりに当時の幼児学校の実際、特にその保育方法を究明する。

2. 幼児学校における保育の実際

幼児学校は、都市化や産業化の進展、移民の増加などを背景に発生していた貧困や犯罪を予防し、その大きな原因とされた無知や悪徳を克服するために、貧困な働く母親の幼児を対象に設置された。それぞれの幼児学校では、敬虔な男性あるいは女性の教師の下で、幼児の能力に適合した有用な知識の教授とキリスト教に基づく道徳的教育が試みられた。

(1) ニューヨーク

ニューヨーク市幼児学校協会は、1827年7月16日に第一幼児学校をキャナル通りにある長老派教会の一階に開設した。初年度に170名の幼児が登録され、二人の女教師の下で一日平均60～100名が学んだ。協会の会長に就任した慈善家ベスーン女史は、ウィルダースピンの幼児学校の理論と実践をニューヨーク市に導入するのに積極的であった。イギリスのプリストールのハーレ氏と交際があった彼女は、彼から幼児学校に関する論文や著作を送付してもらい、1827年に『幼児教育ー生後18カ月から7歳までの貧困な幼児を教育する重要性に関する考察』と題する幼児学校の手引きを出版した。この手引きは、イギリスのゴイダーの著作の抜粋を加え、ウィルダースピン『貧民幼児を教育する重要性について』(1825)を手短かに編集したものであった。

ニューヨーク市では、その他に、『幼児学校と賛美歌』(1828)や『幼児学校の文法』(1832)『幼児学校の入門書』(1834)といった、より具体的な手引書が発行された。『幼児学校と賛美歌』は、イエス・キリストについての賛美歌、祈りと賛美の賛美歌、道徳の歌などが載せら

れていた。いずれの賛美歌も、幼児に平易な主題を与えるものが選ばれた。教師によって賛美歌にあるすべての単語は説明され、一行ごと読まれ、幼児に答えを考えさせ、発見させた。この手引書は、「幼児の精神を発達させずに、記憶を教義問答や、テキスト、賛美歌で積み込む古い計画は、洪水と風がそれを襲うと壊れる砂上の楼閣である」と説いていた。

ニューヨーク市幼児学校協会報告(1828)は、ニューヨーク市の幼児学校の実際を次のように記述している。「5カ月ないし6カ月とかなり定期的に通っていた3-6歳児のほとんどは、黒板のレッスンを読んだり、綴ったりすることが出来る。また多くの幼児は聖書の教えを読み書き出来るし、算術表を繰り返したり、計算盤とレッスン板で足し算、引き算、掛け算が出来た。創造からイスラエルの子どもたちの出国までの聖書の歴史、キリスト生誕とその歴史の一部、十戒をよく知っていた。そして、彼らは多くの賛美歌と教訓的な歌を繰り返し歌う。彼らは絵によって例示される動物の自然史に関する知識をもち、様々な道徳的教えを分析し、文法に関するいくつかの知識を持ち始める。これらすべての教授は、知覚できる事物と活動によって例示される」と。

(2) フィラデルフィア

M. カール尊師は、1824年2月にロンドンに滞在し、スピタルフィールズ幼児学校などを訪問し、帰国後、フィラデルフィアで幼児学校の普及に尽力した。カール尊師らの努力が実り、1827年10月1日にチェスター通りにあった公立学校の一室を借りて、イギリスの幼児学校をモデルにしたフィラデルフィア最初の幼児学校がE. ベーコンの監督の下に開設された。1828年2月には、男女の教師が生後18か月から6歳までの212名の幼児を世話した。

フィラデルフィアで発行された教師用の手引き、『幼児漸養論』(1828)は、スピタルフィールズ幼児学校で採用されている教授コースの紹介に加えて、ベーコンの手引きの抜粋を掲載した。ベーコン『幼児学校教師の手引き』(1829)によれば、幼児学校のカリキュラムは、算術、歌、アルファベット、綴り方、読み、マーチング、遊び、聖書物語、自然史、地理、幾何学によって構成された。この手引きには、月曜日から土曜日までの時間割が15分ごとに例示されていた(別紙表1参照)。例えば、月曜日の午前9時30分(午後2時30分)から午前9時45分(午後2時45分)は、①歌唱あるいはアルファベットを繰り返す(手引き第一章、練習課題第一を参照)、②算数フレームによる加算、③第一クラスの男子は読み方であった。これらのレッスンは、階段状の大教室あるいは二つの教室(別紙の図1参照)で教授された。体罰は禁止された。

方法として、省略法や分析法、問答法、実物教授などが奨励された。モニトリアル法は機械的な部分にのみ使用する。省略法と問答法による教授の実例を示すと、次の通りである。省略法は、単語から文字、あるいは文から単語を省略して、幼児が推理と判断の能力を働かせることを意図したものであった。例えば、「単語における文字の省略」では、幼児がよく知っている名詞や動詞などの単語を選び、最初と最後の文字を文字のフレームの中に置き、間に空白を残す。そして、幼児たちに適当な文字を考えさせる。例えば、The A… e, C… s give milk. 自然史や幾何学の教授は問答法によって行なわれた。階段教室に座っている幼児の前に牛の絵が貼ってある黒板が置かれる。教師は指示棒で牛を指してこれは何かと問う。幼児は牛ですと答える。教師は牛は有用な動物かと問う。幼児は牛のすべての部分は有用ですと答える。教師は牛は何に役立つかと問う。幼児はバターとチーズを作るためにと答える。こういう具合にして幼児は羊、馬、ロバ、ウサギ、豚、犬などを認識してゆく。

(3) ボストン

ボストン市では、すでに1828年に4歳から7歳までの子どもたちに57校の無償の公立初等学校が設置されていた。それゆえ、ボストンの幼児学校は18カ月から4歳までの幼児を受け入れた。幼児学校は、午前8時～午前9時から午後5時頃まで開かれ、毎朝のお祈り・賛美歌でもって始まることが定められていた。幼児学校は、初等学校のように一日6時間、幼児を椅子に釘づけにせず、適度に休息や遊びを取り入れたり、歌唱や行進、拍手などを巧みに利用していた。

ボストンのベッドフォード通りにあった幼児学校には1830年度に幼児学校システムを自分たちの町に導入しようと州の各地から20名の若い女性が訪問し、2、3週間滞在したという。幼児学校の訪問者は、その時の様子を次のように述べている。「幸福とともに彼らの秩序をもたらしている歌唱の大変重要な効果は顕著に明白である。退屈さ、あるいは油断の徴候が現れる時はいつでも、彼らの根気よい教師は簡単な歌の鍵を打ちさえすればよい。そうすれば、小さな楽団は即座に十二分に喜びに満ちて合唱する。全ての目は輝き、顔はにこやかである。…子どもたちは休息後、椅子に戻るように言われた時も、次のように歌いながら遊び場から行進してきた。"We'll go to our places, And make no wry faces, But Say all our lessons distinctly and slow". このように責務を楽しみにすることは、教育の最大の勝利である」と。

And make no wry faces, But Say all our lessons distinctly and slow". このように責務を楽しみにすることは、教育の最大の勝利である」と。

3. 幼児学校に対するペスタロッチ幼児教育思想の影響

ペスタロッチの幼児教育思想は、イギリスの幼児学校という形態を通してのみならず、直接的にアメリカ合衆国に導入された。すなわち、W. C. ウッドブリッジの熱意によってペスタロッチの『幼児教育の書簡』の英訳(1827)と『ペスタロッチ教授の原理と方法』(1829)と題する論説が

アメリカ教育雑誌に掲載され、アメリカの幼児教育論が紹介された。同誌に掲載された論稿「幼児学校に関する所見」(1829)も、「幼児学校で採用されている教授システムは主として教育の最も早い段階で適用されたペスタロッチ方法の写しである」と評価していた。

特にボストンでは、「アメリカのペスタロッチ」と称されたA. オルコットがペスタロッチ主義の幼児教育論を展開した。オルコットは、1828年6月にボストンに開設される予定の最初の幼児学校の教師として3カ月間、就任するように要請され、その準備のためにニューヨーク市とフィラデルフィアに2週間滞在し、幼児学校を訪問した。だが、そこで彼が目撃したものは、「あまりに機械的で宗派的な」プログラムであり、「貧しい家庭の子どもたちがカルビンの理論を吸い込むことによって長老派協会のために仕込まれる正教的信仰の機関」のプログラムであった。幸い彼はそこでM. カーリからペスタロッチの信奉者であったJ. P. グリーブズの“Exposition of the Principles of Conducting Infant Education”などを贈られた。ボストンに戻ったオルコットは、1828年6月23日にサーレム通りに幼児学校を開設した。17名の幼児が入学した幼児学校で、彼は採用された女教師と助手とともに独自にプログラムの考案に取り組んだ。彼は、1830年に『幼児教育の原理と方法に関する所見』と題する論説を発表したが、それはペスタロッチの教育思想の影響を色濃く感じさせた。彼の幼児教育論で注目されるのは、合自然の教育や調和的な発達、実物教授とともに、幼児の自己活動、遊びを重視したことである。オルコットの幼児学校を訪問したS. メイは、教師が「注意を強いるよりも引き起こし、記憶に詰め込むよりも思考を呼び起こす、一言で言えば精神と心のどちらかの特性のいくつかというよりも全体を発達させること」を目指している思えたと言った。

4. おわりに

“Journal of Education”の編集長であったW. ラッセルは、ボストンの公立初等学校が幼児学校の方法を採用するならば改善するであろうと説いた。その幼児学校の長所として、①、知識を感覚を通して教えるという実物教授が行なわれていること、②幼児のあらゆる能力の調和的な発達をめざしていること、③幼児の自然な漸進的な発達に応じた教育が試みられていること、④保育に見られる楽しさを挙げた。また、幼児学校の問題点として、レッスンのほとんどに見られる暗記学習や、幼児の能力を越えた知的教授、不適切な詩や音楽、絵画の利用などを指摘した。こうした問題点以外にも、その言語偏重主義、15分刻みの時間割のみならず、遊びや仲間集団の教育的意味を十分に認めていなかったという根本的な問題点を抱えていた。

なお、本研究は、文部省科学研究費「アメリカの保育史の研究—1820年代から1930年代まで」(基盤研究C、1996年—1998年)による成果の一部である。